

## 『たまきはる』の序文の考察

——その性格と作品との関わり——

森 田 兼 吉

藤原俊成の娘で定家の姉にあたる健御前(尊)の宮仕え時代の回想記『たまきはる』は、作者の執筆時の心情と執筆意図とを伺わせる、女流日記文学では最も長い序を有している。作者自身の意図によつてまとめられた第一部の末には、

本云、

建保七年三月三日書了。西おもてにて、ひるつかた風すこし吹に、少納言殿によませまゐらせて。と。

という書了の日などについて記した奥書(ただし「本云」と結びの「と」は別人のもの)があり、その後に行き空けて、

是ハ存生之時令レ書。  
存生之時不レ見ニ此草子一。没後所ニ見及ニ也。高橋殿南向にて老病之後狂事歟。以ニ養子之禪尼一令レ書云々。文章詞躰不尋常一、雖レ恥ニ披露一暫不ニ破却一。

という奥書、さらに続けて行を下げることなく、本文と同じ高さで、これらみなの中に入道との、かきそへさせおはしましたる事どもをかきつく。

是以下ハ遺跡、反故之中以ニ百筆ニ書寄。

はじめはてもなきいたづら事をなにとなくかきすてられたりけるをみつめて、あとなる人の書つくるなり。きれ、さん、ゝ、ゝ、ゝらびあつめてかきうつす。

とあって、定家によつて付載された第二部に続いている。これらのうち「これらみなの中に」で始まる一文を除けばみな定家の書いたものと判定される。それらを入道殿が書いたと判断して注記した人がだれかは分からないが、定家の没した仁治二年(一二四一)をあまり下らない頃のものであろう。少なくとも、乾元二年(一二三〇)二月廿九日に金沢貞顕が書写校合した本が残っていて、それよりかなり前の注記であることは確かである。作品の成立事情についてこれほど多くの情報を持っている日記文学作品は他にはない。しかし、建保七年(一二一九)三月三日に第一部が養子の禪尼の手をわずらわせて書き了えられ、作者の没後遺作を目にした定家によつて遺跡の反故の中から選び記されたのが第二部であるということだけは確認されるものの、執筆意図にしても作者が真に書きたかったこと(主題)にしても、情報量の多い割りには分かりにくく、論者の解釈も

区々である。それは奥書類の解釈の難しさと、序と作品の内容とがかなりずれているように思われる点に起因するところが大きいであろう。私は前に奥書の吟味から始めて作品の主題や成立について論じたことがあり、そこでは「……ひるつかた風すこし吹に、少納言殿によませまゐらせて」という、成立に関わる奥書の傍線部について、少納言殿は普通に解されているような作品の最初の読者ではなく、作品の書写の協力者だったのではないかと読みを提示した。この作品は養子の禪尼に書かせたというのだから、作者の草稿を禪尼が浄書したと読むのが普通だが、その場合まず読むのは作者健御前その人のはずで、書き了えたその日の昼頃にもう読者が登場してくるのは何としても不可解なのである。健御前が仕えていた八条院・春華門院を続けて喪つた翌年の建暦二年（一一二二）五十六歳の秋頃から大病をわずらつたことは定家の『明月記』に見え、定家はそれを老病と称したのであるが、その後も彼女の体調はすぐれなかつたのであろう。建保七年当時健御前は自分の書いた草稿を整理し、浄書するだけの体力、気力が充実していなかつたからこそ、養子の禪尼（右衛門佐）が浄書することになつたのであろう。そんな養母のために禪尼は、少納言殿に草稿を読ませ、それを聞きながらあれこれ訂正・添削をする養母の指示に従つて草稿を整理し、筆を進めていったものと解するのである。「よませまゐらせて」の「せ」は使役、「まゐらせ」は養母に対する敬意表現と見る。奥書一つにしても、読みの違いで作品の理解のし方も大きく異なってくる例である。本稿ではさきには十分な検討のできなかつた序について若干の考察をおこない、前稿を補強したい。

これまでの奥書の引用は金沢貞顕筆本の複製（注3）により、私に句読点、濁点、返り点を加えたものだが、以下の引用では、複製本によりながらも、読みやすくし、また私の理解を示すためにも、かなを漢字に改め、仮名遣いを正すなど積極的な校訂を行なつている。複製本の丁数と最新の注釈書である新日本古典文学大系本のページとを注記した。

## 二

まず序の全文掲げる。

A たまきはる命をあだに聞きしかど君恋ひわぶる年は経にけり

あるかなきかの身の果てに、時の間も思ひしづめむ方なき悲しさの身にあまりぬる果て果ては、まことに忍びもあへぬ、現し心もなき心地のみすれど、数ふれば長らへにけるほども心憂し。さりとて、かかる物思ふときだに、ひたすら憂き世を厭ひ離るる道のしるべとも、思ひ取られむをだに、嬉しかりける前の世の御契とも思ひなさまほしけれど、月日の隔たり行くままには、ただかき乱し、言ふかひなく恋しき御面影のみつゆばかり慰む方なし。何によそへて、思ひなぞらふる方もありなむと、せめて思ひまはせど、この世の色も匂ひも飽かずのみ嫌はしきこそ、せん方なけれ。なほ弥生の空、あたりも匂ふばかりなる桜ばかりや、大方のことごまにも思ひよそふれど、さしもほどなき色を分きし御名の恨めしさにつけても、さすがに思ひ捨つまじき心地して、いたづらなるままに、ながめ暮らす日数の幾

日とだにたどられぬに、移ろふほどなき風の情けなさも、見し夢に変はらず。

あぢきなきその名ばかりを形見にてながむる花も散るぞ悲しき

B 明け暮れぬとばかり、また同じ世に長らふと聞きたぐひのわづかに残りたるも、昔見し人のおのづから言問ふもなし。六十路の夢は時の間の心地すれど、思ひ続ければ、さも言ふかひなく思ひ出でなき身の、さすがに幼しとも言ふべかりけるほどより、宮仕へとかや人のよからず言ひ古しためることを、朽葉が下に隠れ果てたらむをだに、取る方ならずなり初めにける身と思へば、さまざま移り変はる世の有様、人の心も、ただ我が世ばかりに、昔今けちめしるかに変はり果てにけるかなと思ふに、今さらよしなき古事さへ思ひ出でられて、続きもなく言ふかひなき昔物語を、つれづれなるままに言ひ出づれば、片端をだに、その世を見ぬ人はさすがに聞かまほしうするもありけり。古めかしかりし人々は、「今やうの」、「珍しく」、「見慣らはぬ」とのみ言ひしかど、今はそれも限りなく古体なる昔語りになりけり。

(一オ―三オ P二五三―四)

一読してすぐ気づくように序は二つの部分から成っている。歌で書き起こされ歌で結ばれている部分の一つのまとまりを成していることは形式的にも明らかである。いま仮にこの部分を序A、それ以下を序Bとして扱ふことにする。「人の命はもろく、はかないものと聞いていたのに、君を恋慕い続ける年は幾年も幾年も経過して、君の御命とはうらはらに我身ばかりはむなしく生き長らえているこ

とよ」と作者はまず嘆息するように歌ってこの作品を書き始めている。日記文学の起筆部分は執筆時の作者の心情を色濃く反映しているのが普通である。その意味でAはきわめて重要な部分なのだが、論の展開の都合上まずBがら見ていくことにしよう。

ここではまず、年老いて生存しているわずかな昔からの知人も音信が絶えてしまったことが語られる。自分の生きてきた六十年は夢の間のように思われる。取り立てて誇れるような思い出などないのだが、ただ自分は幼いときから宮仕えをしてきた。その宮仕えの間にも世の中の有様も人の心も大きく変わった。そこで往時が思い出されることも多く、とりとめもない昔物語を、なすべきこともない所在のなさにまかせて口に出すと、昔を知らぬ人の中には、その片言隻句でさえも聞きたがる者がいた、と作者は言う。後白河上皇の五十の賀を服飾中心に描いたところに、

うるさく人の聞かまほしくすれば、おぼえぬことどもの四十年過ぎにしを書きつくれど、我身のほかはおぼえず。

(四二ウ P二八九)

とあるのに呼応し、作品の執筆事情が語られているのである。これから百余年後、卜部兼好は「つれづれなるままに、日ぐらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし」とを、そこはかとなく書きつくれば」として「徒然草」を著わした。健御前は「つれづれなるままに」心に浮かんだ「よしなき」古事を語り、それが思いのほか歓迎された。何度となく繰り返し語った断片的な昔物語を整理し、まとめたのがこの作品だということになる。「よしなき」と言い、「いふかひなき」と書いても、語り手にとっては大切な思い出ばかりであつ

た。その昔物語の中核を成すのは、序に続けて「建春門院と申ししは」と書き始められていることからわかるように、作者が十二歳から二十歳まで仕えた建春門院時代のことである。記事の量も第一部の六十丁半一二一面、序を除いて一一七面のうち、建春門院関係の記事は四九丁八面、八三・八パーセント余りに及ぶ。

ここで序Aの検討に移ろう。

Aでは前に大意を述べた歌の後に、その方を喪った悲しみに耐えきれず慰みようのない日々の思いが綴られている。あの方との死別がこの世を厭い捨て出家へと導く道標になったことはうれしいと悲しみの中で思い思おうとするのだが、月日が隔たるにつれて心を乱し、恋しい面影は忘れられず、慰みようもない。この世の中で多少ともあの方に思いよそえられるのは弥生の空におう桜ぐらいたくと思いはしても、そんな散りやすくはかない桜に通う御名が恨めしくて、嘆きは絶えない。そんな思いの対象となった「君」とはいったいだれのことだろうか。健御前は宮仕えの中で建春門院、八条院、春華門院と三人の主人を喪っている。

建春門院であるというのが、この作品の最初の注釈書である佐佐木信綱氏や、注釈・研究の基礎を築き、作品の普及にも大きな役割を果たした玉井幸助氏の読みであった。序Bの以上のような内容や、作者自身ががまとめた作品の第一部の大半が建春門院に関わる記述であることからすれば、その読みは一応自然であろう。だが、序で傍線部のように桜の花に喩えられている亡き君の名は建春門院より春華門院を差すのにふさわしいことが早く富倉一郎氏、坂本三郎氏によって指摘され、戦後は一時玉井氏の説が流布した

けれども、現在では、作者が一時養育係をつとめ、作者が五十五歳の冬に十七歳の若さで崩じた春華門院であるというのが定説になってきている。序Aを素直に読めば、

① 作者は二十歳の秋建春門院の崩御によって宮仕えを退いたが、その後二十七歳で八条院に再出仕し、八条院と後にその養女になった春華門院とに、この二人が共に崩御した五十五歳まで仕えた。八条院への宮仕えはあしかげ二十九年にも及んでいる。そのような時間をおいて建春門院について「君恋ひわぶる年は経にけり」などと歌い、慰みようもない日々を送っているように描くのは不自然である。

② 「あるかなきかの身の果てに、時の間も思ひしづめむ方なき悲しさの」という表現によれば、作者の今の深い悲しみは老年になってから身に降りかかってきたものであった。その条件に当てはまるのは、建春門院ではなく、八条院か春華門院かなければならない。

③ すでによく言われていることだが、作者はこの世で亡き御方に思い比べられるのは「弥生の空、あたりも匂ふばかりなる桜」だけであろうかと言う。「さしもほどなき色を分きし御名」とも言い、「あぢきなきその名ばかりを形見にてながむる花も散るぞ悲しき」とも歌い結んでいる。これはごく自然に桜花にちなむ春華門院を指すと読まれる。『万葉集』巻十六の巻頭（新編国歌大観三八〇八）の、二人の男に恋われ、男同士が激しく挑みあうのを悲しんで死を選んだ娘子についての歌物語は「昔者有「娘子」字曰「桜子」と書き始められている。娘子の名は

明かではないが、世間の人は桜子と呼んでいたというのである。美しさの盛りにはかなく死んだ乙女という意味で使われた呼称であろう。男の一人の詠んだ、

妹が名に懸けたる桜花咲かば常にや恋ひむいや年のけに

(訓みの用字は伊藤博氏『萬葉集釋注』による)

の歌の、桜の花からそれを名にもつていた人を思うという言い方は、『たまきはる』のこの文脈とも重なっている。『古事記』『日本書紀』が伝える木花開耶姫の名が、はかなくうつろいやすい人の命の象徴として使われていることも、よく知られている。桜花とはかなさの結びついた例を、作者の弟定家が撰者の一人である『新古今集』からも一首引いておこう(新日本古典文学大系による)。

はかなさをほかにもいはず桜花さきては散りぬあはれ世の中  
(春下一四一後徳大寺左大臣)

などのことから、Aでは、作者がひたすらに恋慕しているのは春華門院であると理解するのが、ごく自然な帰結であろう。

むろん、作者は建春門院を深く慕っていたし、その崩御に対する悲しみも言いようもなく大きかった。建春門院と桜の花との関わりもある。建春門院の崩御は安元二年(一一七六)の初秋で、三月初めに安元の御賀として有名な後白河院の五十の祝賀が盛大に催されたばかりであった。その折の華やかな女房たちの装束の描写はこの作品の大きな見所になっている。春の盛りで桜に材を取った趣向が多く、織物に桜模様を織り込んだり、桜にちなんだ詩歌を衣に描いたり、金細工などにして縫いつけたり、「ただ春の花珍しく清らな

る色ふしを」表わそうと人々は競い合った。「やがてその年の七月花の散るやうなりし夢のはかなさに、桜ばかり昔も今も恨めしく、さすが形見なる色も匂ひもなかりけり」(四二〇ウP二八八―九)と作者は書いている。しかし、この場合、桜が恨めしいのは建春門院の名によるものではなかった。そしてここに「昔も今も」とあるように、作品執筆時の今もまた、桜を恨めしく想っているのである。序Aを春華門院の御ことであつたと解することによつてこれも自然に理解しうるのである。

ここに似た表現として、安元御賀の華やかな服飾描写と建春門院の発病・崩御の記事との間に置かれた懐旧・述懐歌五首中の、惜しみかね昔も今も散る花や憂き世を厭ふ道のしるべは

を挙げることができる。なお、建春門院崩御に関わる歌はここ以外にはおそらく崩御の秋に詠まれたかと思われる女郎花の歌(五一〇P二九五)一首だけだが、執筆時の歌であると見られるこの五首は、いずれも、

思ひ出づる我が心とてうつつかは初めも果てもしらぬかげろふ  
面影の見し人数は忘れねど語るは夢に変はらざりけり  
過ぎにしもいま行く末も寐るがうちのはかなき夢よいつか覚む  
べき

思へどもあるかなさかの世の中に今日までいかに長らふる身ぞと、序Aに見られるような身の置き所もない慰みようもない悲しみではなく、この世の無常を嘆ずるもので、基調を異にしている。文脈のままに素直な読んでいけば、歌によつて書き起こされ歌によつて締め括られたAは春華門院への思いなのであつた。作品の冒頭で

「君恋ひわぶる年は経にけり」と詠嘆する作者の心の深奥に、それまでに喪つた建春門院への思いも積み重なつていた可能性は大きいであろう。「命をあだに聞きし」と歌うとき、三十五歳で崩じた建春門院や平氏の人々の無常な死への思いがあつたかもしれない。しかしそれらはいくまで心の奥底に深く沈殿しているものであり、作者の思いの中心は春華門院なのである。

第一部の最後は春華門院の崩御とそれに対する深い悲しみの記述と春華門院追慕の歌八首で閉じられている。

……人に過ぎて限りなかりし御有様も（中略）、この世にたぐひあるべうも見えさせおはしまさざりしうつくしさを、ただいかにせむと、今は病ひになりぬる心の乱れ、この世はいかにても、後の世をだにかくいたづらごとを思ひ出であらばや、と夜昼嘆くべきは差し置きて、尽きせぬ御面影の片時忘れぬこそわびしけれ。

（六一才 P三〇三）

これは序Aと同様の心情であり、追慕の歌も、

恋しさのしばし忘るる時もなき憂き世の夢はいつか覚むべき限りなき面影ばかりとどめ置きていかなる道の姿なるらむ

花の散り露の消ゆるもほどぞある夢に惑ひし暁の空

夢にだにさだかに見えぬ会ふことを寐るがうちとて待つぞはかなき

春の花散りにし空をあふげども光も知らぬ月日なりけり

たれも皆はかなき世をば嘆くともためしも知らぬ我が思ひかななども同じで、前掲の建春門院についての懐旧の五首とは基調を異にすることはすぐわかるであろう。

### 三

序Aが春華門院への思いを述べたものであることはかくも明白なのに、一時的にもせよ、建春門院への思いと誤認されていたのは、ひとえに『たまきはる』第一部の記事の大半、八三・八パーセントまでが建春門院のことであり、序の後半Bの内容と建春門院の思い出を語る記事との間にはつきりとした呼応関係が存在しているからに他ならない。

序のAとBとははつきり思いも思いの対象も異なっている。Aは春華門院を喪つた慰みようもない深い悲しみに終始し、Bでは、年老いて友も多く亡くなり、あるいは音信も絶えてしまったし、わずかの間に世の中はすっかり変わり果てたが、それだけに、往時のこととの一端を語ると。若い人の中にはもつと聞きたがる者もあることが述べられ、「建春門院と申ししは、世々を隔てたる古事にて、御名などだにおほく人も多からむかし」（三才 P二五四）と続く。Bで作者が「つれづれなるままに」言い出し、「その世を見ぬ人はさすがに聞かまほしう」した「古物語」とは華やかな建春門院時代の物語であり、春華門院の悲しい思い出など含まれていないことは明白である。となると、Aをまとめて一つの序と考えるのは無理だということになるのではないか。

『たまきはる』の最初の本格的な注釈書である玉井孝助氏の『健寿御前日記』（日本古典全書）では、Aを建春門院への思いと解してはいるものの、Aを「一 かたみの花」Bを「二 むそぢの夢」として序を二段に分けている。小原幹雄氏他の『たまきはる全注釈』

（昭五八・笠間書院）では、玉井氏の段落分けを参酌し、Aを春華門院への思いと理解しながらも、序として一つにまとめ、前半は「暗に執筆の動機を示している」と見なされる」、後半は「執筆の目的を語っている」という理解をしている。三角洋一氏の新日本古典文学大系本も序でまとめている。共に序であることは確かなのだが、Aのような動機で、Bのような目的でこのような作品が書かれたと考えるのは難しいであろう。AとBには無為に年を経てしまったという思いは共通しているものの、語っていることの隔たりは無視できないだろう。むしろ、この二つは別々の文章であったとする方が理解しやすいのではないか。Aは作品全体の序、いわば総序、Bは建春門院時代の回想を語るための序として考えるのである。『たまきはる全注釈』では、第一部の構造を「序」「建春門院御所」「八条院御所」として大別した上で段落分けを行なっている。このように分けるとすれば、「序」はAの部分だけであり、Bは「建春門院御所」の項に包括される性格のものであった。そして「八条院御所」から春華門院のことは独立させることになる。日記文学では、作品の起筆部分に執筆時の作者の心情が最も強く反映しており、作品の執筆意図や主題と深く関わるのが普通であった。序であればなおさらである。Aは建保七年三月三日に近い頃の作者の心情であり、こうした心情の中から『たまきはる』は書かれたのであった。しかし、それにしても、建春門院時代のことが多く、春華門院の思い出はあまりにも少ない（追慕の歌八首を入れても二分）ことが問題になる。周知のように、定家が姉の遺跡の反故の中から選び集めた第二部の中には、春華門院の発病と崩御までが、その予兆的な二つの夢と共に

に描かれ、哀切で読者の胸を打つのだが、それはあくまで付載されたものであった。

私は前稿で、主に奥書と第二部の検討とから、健御前は日頃から華やかな建春門院の頃の思い出と追慕してやまない春華門院のことを書きたかったのだが、春華門院のことについては憚りのあることも多く、体力も衰え、養子の禅尼や少納言の助力を求めて書かねばならなかったという特殊な執筆状況下では、八条院と春華門院のことは簡単にして春華門院追慕の歌で締め括らねばならなかったのであろうことを述べた。序の構成、特に序Aのあり方はそれを裏づけることになるであろう。

廣島まさる氏（注）は『たまきはる』第一部の執筆時期を「書了」と奥書にある建保七年より前の建保四年前後としておられる。女房名寄せの部分の注記の分析と、序Bの「六十路の夢」の六十路を丁度六十年とし、前掲の安元御賀の記事中の、「おぼえぬ事どもの四十年過ぎにしを書きつくれど」とあるのを丁度四十年とすると建保四年が浮かび上がることからの推定である。廣島氏自身の言われているように六十歳、四十年と固定するより、「六十歳代、四十年余りと幅をもたせて理解する方が妥当であろう」かもしれないのだが、固定して考え方がより文脈に即するようにも思える。建保七年から何年前かに建春門院時代の思い出はある程度まとめられていたことは言えるであろう。

それから数年。気力・体力の弱まりと共に、自分が養育係となつて奉仕し、屈辱的な形で途中から係からは外されたけれども、自分を慕つて密かに何でも相談してくださった、しかし、自分には予兆

的な夢への適切な対応によって救えたかも知れない、その御命を救いえなかつた春華門院のことが一層悲しく、切なく思われる日々が続いていた。そのような中で、かねてまとめていた建春門院時代の回想記をも取り込んで、八条院や特に春華門院の思い出とその女院への思いをも綴った作品を書きたいという思いがつのつてきた。Aはそのような作品の構想を持って書いた序であろう。建春門院時代についてはあらかじめまとめておいたものがあつたから、整理も容易だつたはずである。序Bもその草稿にすでにあつたものかも知れない。前にも取り上げた「六十路の夢」の「六十路」（写本表記むそちのゆめ）の「むそち」だが、散文では、『源氏物語』の例を見ると、

（明石入道ハ）年は六十ばかりになりたれど、

（明石 新編日本古典文学全集二P二三八）

（弁の君ハ）年は六十にすこし足らぬほどなれど、

（橋姫 五P一五九）

僧都「しかじかのことをなむ。六十にあまなる年齢、めづらかなるものを見たまへつる」とのたまふ。

（手習 六P二八六）

僧都「（前略）齢六十にあまりて、今さらに人のもとき背はむはのように、「ばかり」「にあまり」などのことばがつくことからも、

はつきり六十を限定して使われている。その点書き了えたという建

保七年五十三歳より建保四年六十歳のときの方がふさわしく、六十三歳のときなら「むそぢあまりのゆめ」とあるのではないかと思へ

るのだが、和歌では、『新古今集』あたりから使われだす「むそぢの春」「むそぢの秋」「むそぢの夢」などの中には詠作年次が確認できず、六十歳といひながらその前後を含めるものもかなりあるらしい。また『新古今集』一五四〇の、

百首歌たてまつりしに

藤原隆信朝臣

ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山のはの月は隆信五十九歳の作であり、その前の歌で四十七歳で「いそぢの闇」と歌つた慈円の、『拾玉集』四八四九、

せめてただひととせだにを送らばや六十の夢はさもあらばあれは、四八一四の「貞応元年七月五日朝、すずろに詠之」がこの歌群全体のもとのすれば六十八歳の作である。むろんこの時代の歌は多く板構の世界のものであり、序Bの「むそぢのゆめ」も和歌的表現と見れば何歳と確定しにくくなるのだが、六十歳で書いてふさわしいし、それを六十三歳の年に転用してもおかしくはない語ではあつた。

建春門院時代についてはこうして楽に書けたのだが、肝心の春華門院については、前稿で述べたような理由で十分に書くことができず、現在のような形で終えるしかなかつたのであろう。

Aは現在の形での『たまきはる』の序である。と同時にそれは、現在の第一部に第二部のような内容のほとんどを加え、さらに、例えば春華門院の幼少時の逸話などを加えた、もつと大部な、あるべかりける作品の序でもあつたのである。作品が本意ではない形で終わってしまったために、序Aと作品の内容との間に齟齬が生じ、この作品の理解を難しくしてしまったのである。



作者が自分の作品をどう命名していたかはわからない。金沢貞顕筆本には表紙上中央にうちつけ書きで「たまきはる」とある。貞顕のものとは別筆のようであり、定家が見た本にはどうあつたかもわからない。この時代の通例として作者自身は題名を書いてはいなかった可能性も大きい。結局書名の問題はわれわれがこの作品をどう呼称するのが適切かということになる。作者は建春門院中納言、八条院中納言という二つの女房名を持っていた。女房名を冠して「建春門院中納言日記」のように呼ぶか、複数の女院時代のことであるから、わかつている実名の健御前の名を冠するか、ということにもなるのだが、どの女院に対する思いや回想にも共通することは、むしろ生き長らえている我が身の孤独と喪失の悲しみ、往時のなつかしさなどであった。序Aの頭、つまりは作品の巻頭に置かれた、たまきはる命をあだに聞きしかど君恋ひわぶる年は経にけりは、春華門院へのものであるが、そうした思いを集約した形のものであり、その初句から採った『たまきはる』はまさにこの作品の書名としてふさわしいものであった。現在『たまきはる』の書名に統一されつつあるように思われるが、より積極的な意味でこの書名を推したい。金沢貞顕筆本の複製本の入手が容易になり、「たまきはる」と表紙に書かれたその本を手にして読むとき、もはやこれ以外の書名は考えられなくなってくるのである。

注1 『たまきはる』の作者の名は定家の『明月記』によりわかつて

いる。玉井孝助氏（日本古典全書『健寿御前日記』昭二九・朝日新聞社）は『明月記』に見える「健御前」を姉妹の延寿御前・

『たまきはる』の序文の考察 —— その性格と作品との関わり ——

龍寿御前・愛寿御前などの例から類推して「健寿御前」の略称とされたが、石田吉貞氏の研究により略称でないことが明らかにされた（『健寿御前日記』の書名は改むべきか」国語と国文学 昭四四・一一）。

2 『たまきはる』の成立と主題 —— 奥書・第二部の検討から第一

部へ——」日本文学研究 二九 平五・一一

3 津本信博氏『たまきはる』平五・早稲田大学出版部

4 三角洋一氏『とはすがたり たまきはる』平六・岩波書店

5 『建春門院中納言日記新解』昭九・明治書院

6 注1所引書。

7 『いさよふ月』と『あちきなきその名』と」国語解釈 昭

一一・五

8 『建春門院中納言日記の覚書』国学 昭二三・一

9 『健御前日記の構成について』鶴見女子大学紀要 昭四四・

一一